

【教養教育科目】

- 1 教養教育科目の講義では、なじみがない研究にいかに関心を持ってもらえるかを重点に授業ならびに資料作成を行った。
- 2 インターフェース科目「食と健康Ⅲ」では、講義内容を理解しやすくするために実際に測定を行ったり、身近な例で説明するなどの工夫をした。
- 3 英語については、新しいテキストの開拓が十分にできた。
- 4 英語論文の抄読会および解説を行い、論理的な思考トレーニングを試みている。
- 5 インターフェース科目(ライフサイクルからみた医療)では受講学生の大幅な増員があった。注意力が散漫にならないよう、学生からの発言を誘導するよう積極的な声かけを行なった。また、イメージのつきやすい症例を用いて治療に興味を抱きやすいよう資料作成を工夫した。
- 6 教養教育科目として基本教養科目を一部刷新した。
- 7 インターフェイス科目では医学部、医学部以外に関わらず抗菌薬の適正使用の必要性を理解させ、国家アクションプラン自律的に発信さえ問題解能力を涵養する課題を課して評価した。
- 8 「医療人キャリアデザイン」では医・看合同でキャリア教育・多職種連携教育を行っているのみならず本庄の学生の受講者も引き受けており、彼らにも積極的に非医療従事者側からの視点での意見を述べさせている

【専門教育科目・講義・演習】

- 1 講義プリントの改訂、PGによる動画の採用、スライドと板書の併用、講義の小レポートの提出
- 2 質問時間を設けた。
- 3 講義において板書の書き方に工夫をこらしてわかりやすいとの高い評価を得た。
- 4 教員と学生との双方向性の講義を意識し、適宜、質問を投げかけ自ら考えさせることを心掛けた。
- 5 本試験の採点結果を寸評の形で学生に公開した。
- 6 免疫学の講義は、教科書を指定し、しっかり学習できるように指導したほか、スライド等は新規に作成した。配付資料をさらに改善し、見やすいものにした。PBL(U7)の講義に関して、常に最先端の情報を提供すべく、スライドや配付資料の更新を行っている。
- 7 講義に関しては、不要な情報を極力少なくして、配布スライドを見やすく改善した。
- 8 授業評価アンケートや個別のコメント等を参考にし、講義内容の改善や進み具合の適正化をはかった。
- 9 前年度の試験結果や学生による授業評価アンケートの結果を基に、講義・資料の内容の見直しや改善を行った。
- 10 スライド・配布資料の内容を整理し、演習問題を取り入れることで自己学習を促した。
- 11 形態学の意義を、顕微鏡技術の進歩との兼ね合いを織り交ぜながら、学生に伝え、臨床的な興味とリンクさせた。
- 12 学生への問いを増やし、修得度合いを確認しながら指導し、理解したことの言語化を働きかけた。
- 13 限られた時間でいかに伝えるかの方法、例えば用いる言葉やプレゼンテーションなどを相互で評価させ、認識を促した。
- 14 肉眼解剖学の間試験、骨学試験、小テストにおける成績不振者(延べ44名)の状況報告書を作成し、各々の担当チューターに直々に指導を依頼した。該当学生のうち、相当数の者が最終試験、再試験では挽回できたことから、一定の効果があつたと考えられる。
- 15 学生の自己学習力向上のため、小テストの結果を迅速にフィードバックし、不合格者への個別指導を徹底した。
- 16 臨床医を非常勤講師として招聘することで、学生に基礎医学から臨床医学への接続を意識させた。
- 17 講義では、担当教員が一方的にしゃべるだけでなく、学生への質疑応答を講義中に心がけた。
- 18 解剖学では学生に対し、適宜、口頭試問をし、理解度を把握しながら指導をしている。
- 19 生理学講義において、難解な生理学的現象を動画化することにより、イメージ化を図る
- 20 講義を実施するにあたり、図を多用した授業プリントを作成し、学生が分かりやすいように心掛けた。
- 21 1) 植物性機能生理学では、学生が自身で考えられるように、学修目標を明確にしたうえで全ての学修内容を「問い」と「答え」と「その論証」の思考パターンに従って説明し、学生のアクティブラーニングを促進した。
- 2) 植物性機能生理学では、学生の興味をひき出すため、講義内容に関連する臨床例を折り込んで、より具体的な理解を得られるようにした。
- 3) 植物性機能生理学では、高い講義品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を次回の講義に即時にフィードバックした。
- 4) 植物性機能生理学では、予習と復習によるアクティブラーニングを促進するため、講義資料は大きくカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。
- 5) 植物性機能生理学では、理解しにくい点に対応するため、学生からの質問には十分な時間を割いて、マンツーマンの面談で丁寧に指導した。
- 6) 植物性機能生理学では、本試験および再試験前の質問に対しては、1回に15分以上の時間をとって面談し、質問内容に加えて、本人の弱点と勉強方法を具体的に指導した。

22	薬理学講義において、疾患部位における解剖学的構造および生理学的機能を説明した後に、病態下における機能変化および薬物の薬理作用を解説した。また、各单元ごとに例題を出して学生に考えさせ、薬理的思考のトレーニングを行った。
23	各单元終了時に中間試験を3回おこなった。これらの試験では暗記項目はCBT試験に準じた必要最小限の項目のみにして、薬理的思考力およびデータ分析力を養うための問題を出題した。
24	医学科の講義では、担当講義内容に最新の情報を加えつつ、学生が受け身の授業にならない授業展開に取り組んだ。
25	看護の講義は、短時間で広範囲を教える授業の為、看護師に必要なポイントを簡潔かつ的確にまとめていく授業展開に取り組んだ。
26	毎回講義内容をまとめたプリント(シラバス)を準備し、学生に配布した。
27	講義内容をさらに分かりやすく説明するために、スライドを作成し講義を行った。
28	講義・実習では、マクロ像や病理組織像を多用し、大事なところをコンパクトに説明するように心がけた。学生の質疑に対しては、できるだけ丁寧に複数の病理医で説明するようにした。
29	講義や実習では、シラバスを配布し、理解の助けを改善した。また、学生の質問には、時間外でも積極的に対応した。実習も時間外の実習を行った。PBLチューターでは、実際の学会発表などのやり方を指導した。
30	医学科学生への講義では、病理学の用語、定義、概念を理解できるように、講義内容を吟味し、実際の講義を行った。
31	看護科学生への講義では、図を多用して病理学の理解を助けた。
32	看護科の講義では、病理学の概念、疾患の定義を日常診療や看護と関連づけ、興味を持ちやすい内容に配慮した。
33	実際の写真や図を多く用い、印象に残るようなスライド作製を行った。
34	医学科の講義資料を改善したところ、学生の総合評価も良好で、取組みが高く評価された。
35	看護学科の講義資料を改善した
36	分子細胞生物学、微生物学 講義用プリント及びスライドを学生の意見を参考に一部作り変えた。
37	講義内容および配布資料は、すべて毎年アップデートしている。
38	社会医学の講義期間中の昼休みの時間を利用して医師会と共同でキャリア教育を実施した。
39	保健統計の資料は毎年新しいものに更新している。
40	公衆衛生分野の総括講義の問題作成と取り纏め、解説を行った。
41	看護科の疫学Ⅱのグループワークでは研究計画にとどまらず、Webを使った調査の実施分析、発表ができるように工夫した。
42	講義のねらいや教えたことなど、教育の理念を解説し、学生の興味を促した
43	過去問を公開し、解答例を示すことで、学生の理解を促した
44	講義では学生の興味を引き出すよう考え、板書の見易さに配慮したほか画像提示も行い、わかりやすい説明を心がけた。
45	臨床医を目指す学生が多い中、法医学に興味をもたせるよう、実際に起きた事例もまじえて講義した。
46	画像教材で、大規模災害や虐待事例について講義を行った。
47	学生ラウンドと膠原病の診断学の講義を行った。
48	関節リウマチや関節炎に対する基礎講義を行った。
49	学生用講義プリントを充実させ、自己学習を行い自分で理解し発展学習ができるように工夫した。
50	膠原病の画像診断・エコーのシラバスを改訂整備しなおした。
51	講義においては学生が興味を持てるよう実際の経験症例を豊富に盛り込みながら講義資料を準備した。
52	ユニット3、呼吸器講義では、一方向の講義ではなく質疑応答の時間を作り時間内に疑問を解決できるようにした。
53	講義では教科書的な内容だけではなく、実際の症例提示を交えて病歴、症状や検査所見から診断に結び付ける考え方を身につけられるよう心がけた。
54	写真スライドや動画を用いた解説を行った。
55	学生から試験の解答の質問に対して、メールや教授室でわかりやすく説明した。
56	後期に脳神経内科をローテートしてきた学生に対して国家試験の対策講義を始めた。
57	講義資料は、表や図、グラフを用いて理解しやすいように工夫した。
58	系統講義においては、心エコーの各疾患毎の実際の動画を引用するなどして、学生の興味・理解度の向上に努めた。
59	肺循環の講義において、これまでの肺塞栓症主体のものから、より実臨床に則した肺高血圧症全般についての講義に変更した。
60	単なる羅列型の講義ではなく、重要箇所を臨床体験を踏まえて強調するよう配慮した。
61	病棟での講義は、少人数の良さを生かして、その場で理解し習得できるよう配慮した。
62	佐賀で働く医師の実情を伝え、佐賀に残る医師を増やすことを目的として、キャリアプランに関するレクチャーを行った。
63	講義では、単なる疾患の羅列・説明といったなじみのない疾患では理解困難な状況に陥らぬよう、具体例を挙げ、また実際の診療現場で重要となる事項を中心に説明し、理解の一助になるよう取り組んだ。
64	シラバスや内容は毎年改訂に心がけている。

65	理解しやすいように画像や動画を多く取り入れて授業を行った。
66	講義資料の配布（穴埋め式）
67	講義内容のまとめのチェックテストを授業最後に行う
68	教科書や資料の使い方指導
69	論文検索の仕方指導
70	症候学・診断学を症例を通して教え、学生の自己学習能力を引き出した。
71	講義は一限目に具体的な到達目標を説明し、講義を行うことで学生に学習目標を明確にした。さらに講義中に症例を呈示し知識を繋がるように説明した。また最先端のエビデンスに基づいた診断学、治療学についても説明した。
72	肝疾患の症候学、肝癌、肺炎等について臨床に重点を置いた講義を心掛けた。
73	第110～113回医師国家試験問題はもちろん、最新の114回問題にも目を通し、国家試験で問われている内容を重点的に指導した。
74	肝疾患について佐賀大学医学部附属病院が佐賀県の肝疾患診療連携拠点病院に指定されていることや以前の肝疾患医療支援学講座の取り組み等、臨床医学と公衆衛生・産業医学との連携など座学の授業の垣根を越えた内容を講義している。
75	講義内容に診断基準や診療の新しい知見を盛り込む。実臨床の症例の話をしたり、実際の健診や外来での内分泌疾患の数を話すなど、内分泌疾患がより身近に感じられるように具体的に話をする。
76	特徴的な身体所見や病変の画像を使用し、わかりやすく、興味をもてるような講義をする。
77	看護科一年生の講義満足度向上を狙い、スマートフォンやアプリを用いた講義を行った。
78	授業の資料の更新
79	講義スライドの改訂を行った
80	授業内容で用いるスライドに、写真やシエマなどの画像をたくさん取り入れることにより、わかりやすく学生の理解を含める方針とした。
81	学習意欲を高めるため、講義内容で扱う疾患をもつ患者が、現実的にどういうことで悩んでいるか、またその治療を行うにあたり、本人や家族の環境にどういう変化が出るかなど具体例を説明した。
82	講義において皮膚科特有の手術器具や手術のポイントに重点を置き解説した。
83	シラバスをわかりやすく改善した
84	講義では、学生の興味を引くよう、動画なども取り入れた。また、内容を簡潔にまとめること、重要な点をハイライトすることによって、より要点の理解しやすい講義となるように工夫した。
85	より学生が興味をひくように、講義内容を写真や画像が多くなるように工夫した。
86	新しい知見や最近の話題を入れる
87	図やビデオを提示して視覚的にもわかりやすくする
88	先天性心疾患シラバス 図の追加、変更
89	末梢動脈疾患シラバス 図の追加、変更
90	国家試験に出題されることが想定される内容を重点的に指導。
91	学生の学ぶ意識を聞きだし、適切な情報提供を行う。
92	講義では教科書的な説明に終始せず実臨床でどのようなことに注意すべきかなどイメージをしやすいように工夫し、また最近の
93	国家試験の問題なども提示してバランスよく講義するように意識した。
94	医学科3年生講義のスライド作成、校正を行った。
95	医学科4年生の研究室配属となった学生の指導を実行した。
96	ビデオ供覧
97	総合ディスカッション
98	講義において動画や写真を多く用いて、視覚的にわかりやすいように工夫した。
99	スライドのシラバスを用意する
100	質問をしながら考えさせる
101	講義時のハンドアウトを1冊に製本し、学生が使用しやすいようにしている。
102	講義に関しては、学生が身近に感じられるように昨年よりさらに具体例の提示を増やし、写真・イラストなどを盛り込んだ。
103	講義内容・シラバスの見直し
104	講義においてはPowerPointを用いて教材作成をしているが、授業終了後には作成した講義内容すべてを公開
105	講義や実習の評価を適宜学生からアンケート並びに口頭で聴取して内容改善を図る。
106	講義内容向上のため、知識習得に日々努めている。
107	講義では、実際の精神医療の現場だけでなく他の領域の医療現場や学生の個々の日常生活でも役立つ内容になるよう配慮し、精神療法や心理検査の具体的な方法論や技術だけでなく、ものの見方を伝えるように工夫した。
108	講義では、説明内容がスムーズにいくように、導入部分を分かり易く構成し、資料の作成、配布を行い、スライドを併用した
109	講義では学生が興味を持てるように実際の症例や画像、動画を多く取り入れるよう心がけた。
110	医学部ユニット10講義では、前年度より講義時間(コマ数)を倍増(2コマ→4コマ)し、過去8年間の医師国家試験に出題された「小児外科疾患」を網羅する講義内容へと充実させた。
111	看護学科講義では、ヴィジュアル効果で学生の理解を深めるよう、講義スライドのみならず配布資料もカラーのものを作成して配布した。

112	最新のエビデンスに基づき、シラバスのアップデートを行った。
113	ユニット5については、内容が多いためゆっくりと話をするようにした。
114	ユニット10については、発生学内容を詳細に説明した。
115	講義はパワーポイントスライドを用いて視覚的にも理解しやすい様に心がけた
116	昨年度から講義スケジュールが改訂され、今年は、そのカリキュラムでの講義スケジュールに対応する時間があったので講義時間を考えて、講義内容の大幅にブラッシュアップさせ、最新の臨床エビデンスを含めて、臨床実習やCBTへの準備
117	国家試験にも対応可能なように考えた。出席確認が厳密ではなかったことで、昨年よりも、出席者が少なく、途中退出もいたが、学生評価は高得点であった。(この点は、出席率と評点に反比例の傾向があるのではないかと例年思っているの、そのあたりは考慮していただきたい)。看護科の授業態度は昨年より改善していた。
118	解剖学的な位置関係などをわかりやすいように動画、写真、イラストなどを利用した
119	実際の患者さんの実例を示し、患者さんの協力を得ながら、教科書の深い理解ができるように留意した。
120	実臨床での治療方法について具体的に伝え、興味を引き出す(講義)
121	理論的に考察し、回答にたどりつく思考過程を重視して指導すること
122	講義やPBLや外来診療ではなるべく国家試験で質問されやすい内容をふまえて質問したり講義をしたりした。
123	JCIMELS学生版を最初に行ったが、医者側の人数がなかなかそろわずに、最後はNSTモニタリングの授業を介して、産科の面白さや佐賀大学参加で行っている学会発表内容について触れ、興味を広げられる努力をした
124	解剖について理解が乏しい学生が多く、モデルを作成し説明した。縫合については、縫合SASUKEというタイムトライアルを作成し、学生自身が自習できるよう工夫を行った。
125	講義内容を改め、わかりやすく、臨床に即した内容にした。
126	コアカリや国家試験出題基準、国際認証に沿った講義や実習内容の更新
127	講義では動画を用いて分かりやすく解説した。
128	講義は一般的な内容も取り込み、学生にもイメージしやすい内容を重視した。
129	講義の際に、検査や手術の動画を使用した。
130	視覚的に理解、記憶しやすくなるように講義資料を修正した
131	今年度から講義担当をしたが、学生が興味を持てるようなスライド作り(イラスト、検査の実際、動画使用)が出来た。
132	新生児聴覚スクリーニング講義では、耳鼻咽喉科学会が推奨するマニュアルを授業中に配布してより具体的に理解出来るよう工夫した。
133	講義はできるだけ学生に興味を引いてもらうために、文字を極力減らして、インパクトのある症例写真を中心にスライドを作成した。またいかに医科と歯科(特に口腔外科疾患)が密接に関わっているのかを強調して講義を行った。
134	選択コースでは、顎顔面外傷に限らず、日頃接することのない口腔内の疾患や所見の取り方について学んでもらった。また各自の進路(診療科)に併せて遭遇しうる口腔内疾患を学んでもらった。
135	各学生が発言した内容をさらに膨らませるように指導し、課題への取り組み、討論を活性化させた。
136	講義スライドを資料配布し、学習効果を高めた。
137	シラバスを視覚的にアピールするように作成した
138	症例を提示して具体的に説明するようにした
139	症例プレゼンテーションの指導に関しては、これまで各自の指導に任せられていた。そのためプレゼンテーションの作成に時間がかかっていた。本年度よりプレゼンテーションのテンプレートを作成し、学生がプレゼンテーションを作成しやすくした。作成にかかる時間が短縮したことで、それぞれの担当麻酔科医とのディスカッションを時間内に十分できるようになったのではないかと考える。
140	学生が周術期管理に関してどのような疑問点を持っているかを抽出し、日々の症例に関してディスカッションを行う。
141	麻酔科医が行う手技に関して、その手技を行う目的、注意点、合併症、ポイントを流れに沿って説明する。
142	産科麻酔、小児麻酔、特殊麻酔の講義を担当した。必ず押さえていなければならない重要事項に加えて、最近の新たな知見も講義内容に加えた。
143	講義においては、前年度までのスライドをさらに改良し、図を多く用いたスライドを作成した。
144	授業評価に基づき、興味がわくよう講義用スライド内容の見直しを行った。
145	担当した講義では、知識のみならず、実臨床例の紹介を多く行い、写真を多用した。
146	講義評価に基づき、わかりやすいよう講義用スライド内容の見直しを行った
147	放射線科としてできるだけ多くの画像を紹介しようと講義のスライドに盛り込んだ
148	医師国家試験問題、ゲノム医療講習会の問題を参考にし、問題解決型の講義・実習を加えた
149	実臨床に基づいた症例提示、経験談を中心に教科書的な知識と現在のガイドラインに照らし合わせ講義・説明を行った。
150	例題を増やした
151	EMPの教材で、USMLE Step 2(CK)のテキストを部分的に導入した
152	より操作が簡易な統計解析ソフトJMPを導入して教育を行った。
153	毎時間小テストを行って理解度確認を行った

154	毎回ランダム座席指定方式を行う事で、Active Learningの手法である話し合い学習法を有効に運用した。これに関してアンケートを取り、結果を医学教育学会にて発表した。
155	医療倫理・プロフェッショナリズムの講義では、アクティブラーニングを取り入れ、学生が活発に討論・発表できる場を構築した。
156	動画やビデオなどのメディアを用いてより臨場感を出し、臨床の場でどのような決断を下すべきなのか、実体験に近い講義・実習になるように工夫をした。
157	長年の米国での研究・教育経験を活かし、症例や法律(HIPAAなど)、最近の研究事例を活発に議論する機会を講義中に設け、学生の学習意欲・思考力高めるよう工夫を行った。
158	学生からの評価は非常に高く、全ての講義で4点後半半の得点をいつも得ている。
159	PhaseⅢの各Unit中にCBIを取り組むことで予習・復習の機会をもうけるようにした。
160	PhaseⅢUnit13臨床入門では、小グループに分けて演習・実習が充実するようにした。
161	看護学科 人体の構造と機能(解剖学・生理学)では、学生に配布する講義資料の改訂を行った。また、自己学習の補助とすべく、国家試験過去問集を配布した。本試験前に希望者を対象に補講を行い高評を得た。
162	医学科 組織学、分子細胞生物学Ⅱでは、講義およびホームページ掲載資料の改訂を行った。
163	講義内容の見直しを行い、看護実践能力の育成に繋がるよう、フィードバックを充実させた。
164	演習についても、より教員の指導が充実するように演習方法を見直した。また、演習時の必要物品についても拡充を図り、学生の評価も良好で、看護実践能力の向上に役立った。
165	演習のレポートは、評価BCの者はAレベルに至るまで繰り返し指導し、学生の能力の向上に繋げた。
166	ルーブリック評価を導入するとともにアクティブラーニングを積極的に取り入れた。
167	講義、演習科目において講義と演習のつながりを明確にし学生が演習時に確実に習得できるよう視覚教材等を多様に用いるなど講義の工夫を行った。
168	演習科目においては、本年度は他講座教員と協働するため、事前打ち合わせ、技術のデモンストレーション練習を丁寧に行い、教育内容の教員間の統一を図ることで、学生への統一した教授ができるよう取り組んだ。
169	附属病院看護師の研修の機会を利用し、病棟指導者へ学生のレディネス、教育の視点などを共有し統一した指導ができるよう取り組んだ。
170	授業内容、方法に関する学内外の研修に参加し、教育内容、方法の研鑽を行った。
171	講義においては、昨年度の課題を踏まえ講義内容を追加、修正を行い、新たなる参考書を追加して講義内容の充実を図った。また、本年度は新たに受け持つ講義もあり、教材開発なども行いつつ講義を組み立てを行った。
172	演習においては、学生が学習しやすいよう手順書の修正を行い、講義の内容が連動できるよう手順書のなかに認知のポイントを織り込んだ。また、実践しながら学びを深められるよう、学生とのディスカッションに時間を割いた。
173	講義については、重要なポイントをまとめた資料を印刷物として毎回学生に配布した。精神看護をイメージできるようにスライドやDVDなどを活用し視覚的に学習効果を向上させることに努めた。テキストのみの内容に偏らないように適宜、教材を活用し、また個々の学生が考える力を伸ばしていけるように、事例を用いて看護過程の展開に取り組み、より現実的にケアの場面をイメージできるように努めた。可能な限りアクティブ・ラーニングを取り入れるよう試みている。
174	精神看護学各論Ⅱでは、3年次後期の精神看護学実習で受け持ちやすいケースや疾患(統合失調症)を考慮して事例を作成し、臨地実習で実際に使用する記録用紙で事例展開をした。
175	知識の定着化を図るため、各授業項目が終了した後に関連問題を解かせている。その際に、看護職としての対応/考え方/法的根拠等も併せて教授している。また、授業中に学生自身に考えさせ発言させる時間を設けアクティブラーニングを意識して行っている。学生の授業評価コメント等から、この授業方法は好評をえていると考える。
176	講義においては、臨床実習や継続教育との乖離がないよう、新しい論文や国家試験の出題基準をもとに授業を構成している。
177	学生の進捗状況に応じて、視覚教材を取り入れるなどの工夫を行っている。
178	Simulation, Integration, Nursing skill, Communication, Humanity, Infection Control を統合したシミュレーション教育である。
179	授業アンケートに基づき、継続して学生のニーズに対応した講義内容を導入した。
180	講義内容に触発された個別の求めに応じて面接を行なった。
181	自身が講義した全ての科目で、学生による授業評価の「満足度」が4を超えており、また、教科主任科目の過半数で「講義の工夫…」が4を超えており、これらの取り組みは評価できる。
182	演習には、ルーブリック評価を取り入れた。
183	成人看護援助論Ⅰ・Ⅱでは、アクティブラーニングを用いた教授法を講義の中に取り入れた。
184	成人看護援助論Ⅰでは、講義形式から、事例を用いたアクティブラーニングへ変更し、グループ討議、解説とした。
185	成人・老年看護学演習では、より実践的な実習につながるような思考過程と技術演習を行った。
186	演習では、ルーブリック評価を取り入れ、学生の到達目標を具体化した。
187	実習前の技術演習をアクティブラーニングで行った。
188	2年次の科目では他教員とともに、これまで講義中心で教授していた内容を事例を用いた看護過程のグループ演習に変更し、学生のアクティブラーニングを促進するための構成改編に取り組んだ。より、実践における知識の活用を重視した構成にできた。

189	グループワークでは、学生主体で効果的なディスカッションを進めることができるよう、ファシリテーターとしての役割を果たすことに努めた。
190	成人・老年看護学演習では、学生の理解を高めるために、ミニッツやレポートからのフィードバックを行ったり、実習を想定した看護計画の報告を講義内に設け、不足点について適宜コメントできるように講義・演習を組み立てた。
191	成人看護援助論Ⅱ・Ⅲについては、より実習に活かすことができるような構成とした。
192	講義・演習では、困っている学生に対し助言を行い、全体での学びが深まるよう援助した。また答えを教えるのではなく、学生に考えさせるような質問を行うことで、学びを深めるよう関わった。
193	キャリアデザインの学習方法にアクティブラーニングの割合を大幅に増やしたことが高評価に繋がった。
194	看護倫理の事例は、学生がより興味・関心を持って、かつ倫理的課題の論点や解決策が明確で臨床に即したものに変更した。また、複数事例を提示し、学生が学習したい内容を選択できるようにしている。
195	今年度開講の卒業研究では、看護学科教員全員が個別指導を行うため教員間でGIO、SB0、授業方法の検討・共通理解、文献研究へ統一、ルーブリックを取り入れるなどして、できるだけ複数人数が個別に指導することでの違いがないように努めた
196	講義、事例を用いた演習では、グループワークと通して学びが深められるよう指導を行った。
197	前年の課題を踏まえ、また教員が1名減となったことを受け、教育の内容の精選と集中、臨床との連携強化を図った。
198	分娩介助技術の習得については、動画（全体、手元）を使ってリフレクションすることで個人の課題が明確になり、また、互いの課題を共有することで、各自技術を高めることができた。
199	母性看護学の授業は模型や動画を使って理解を深め、次の援助論の根拠につながるようにした。看護過程では、1つに事例を丁寧に展開させた。特に統合することが課題だったため、情報の整理を支援した。演習では、附属病院の助産師に参加してもらい、学内での演習状況や学生のレディネスについて理解してもらった。このことは、母性看護学実習においても、臨床実習指導者の指導内容が学生に応じたものであったことから効果があった。
200	講義内容については科目責任者に内容の確認をした。
201	演習においてアクティブ・ラーニングのジグソー学習法、ホワイトボード・ミーティング®を導入し、演習を工夫している。
202	演習及び実習においては、ホワイトボードを取り入れた演習を実施した。ホワイトボードで視覚化することにより、より人に伝わりやすく、話しやすかったとの意見が聞かれた。演習は時間が少ないとの意見もあったが、内容を凝縮することにより、実習等の短時間で判断が求められる実践の場で、活用できたと考える。来年度も、趣旨を明確に伝えながら実施していく予定である。実習において患者選択が困難なことも多かったが、短期間で看護過程が実践できる内容へ変更し、実習環境を調整したことで、短期間の患者さんの受け持ちも可能になり、学ぶ機会の多い実習になったと考える。
203	シラバスに不合理がある個所は、合理的に、また学生の理解のしやすいように改善した。
204	講義の構成を工夫し、学生が興味を持てるように組み替えた。アクティブラーニングやペーパー・シナリオ・シュミレーションなどを取り入れた。
205	公衆衛生看護学の一般的に教授しておくことの内容や最近の知見について、授業で取り入れた。学生から授業がこれまでと比べて丁寧で興味深かったと評価を受けた。
206	麻酔シュミレーターや、薬物血中濃度シュミレーターなどを活用した
207	麻酔方法に関して担当麻酔科医に計画をたてさせ、内容に関して議論した。
208	講義ではスライドをシラバスにして配った。実際の症例の画像を用いて、理解しやすいように提示した。
209	講義においては、専門用語と平易な言葉を並行して使用することで、より理解が深まるよう心がけた。
210	講義スライドを学生のレベルを検討しながら、内容の追加・修正をおこなった。
211	学生に対する指導では、学生たちの疑問に根気強く対応した。
212	学生たちの疑問を踏まえ、疑問を解決できるような講義内容に修正をおこなった。
213	臨床実習中の講義では臨床の内容を盛り込んだ実践型講義を目標とし実施
214	講義担当領域のクエスチョンバンク確認を行い、国家試験出題内容も講義内容に加筆した。
215	インタラクティブな講義を実現するため、スマートフォンによる投稿システムを利用した講義を行った。
216	クリニカルエクスポージャーではコミュニケーションスキルの重要性について説明を行い、面接後にも振り返りを行うことで、各自何が問題であったかなどについて、学生と討論を行った。
217	学生講義ではPowerPointでのスライドで写真を多用し、印象に残る授業を心掛けた。
218	昨年のお話が飛んでわかりにくいという反省を活かし、系統だった講義を行えるように内容を変更した。
219	講義は、導入で質問がしやすい、快適な雰囲気づくりに努めた。学生に対する質問を多く取り入れ、学生が集中を維持できるよう努めた。
220	講義内の寸劇は、学生の印象に残るよう誠実に演技した。
221	学生講義においてインターネットを介した双方向性アンケートを可能にするサービス（mentimeter）を利用し、授業の工夫を行った。

222	ユニット11の講義に関しては、重要なポイントを強調しつつ、分かりやすい内容になるように努めた。
223	学生講義では講義スライドやプリントを用いながら理解しやすいように説明に工夫した。
224	患者の背景に配慮し、内視鏡検査・治療は事前に概要を説明し、検査後も画像所見の理解に協力した。
225	臨床事例を提示し、具体的な感染症疾患として印象に残るよう心掛けている。実臨床に準じた問題解決・感染症診断のアプローチを提示している。
226	感染症選択実習において感染症や抗菌薬、感染対策に関する基礎的講義を行うとともに、診療を通じた臨床現場で活用可能な知識獲得を目標としている。
227	近年の医療安全の重視に基づき、ユニット6に今年度より「がんと医療安全」の講義を開始した。
228	臨床入門で今年度より初めて「模擬カルテ開示」を取り入れた。
229	講義内容のスライドについて、より臨床現場に即した内容に変更し、学生が興味を持つ内容に改善した。
230	医学科1年生から6年生までの教育に際し、卒前・卒後教育（臨床研修、専門医研修）の切れ目ないつながりを意識し、常に、それらに関連付けて、学習者のモチベーションを高くするように心がけた。
231	授業では、できるだけ能動的になるように、演習、実習を多く取り入れる工夫を行った。
232	Audience response System (ARS) を用いた心電図教育法を取り入れるなど指導法の工夫を取り入れている
233	退屈させない工夫として、演習を用いた参加型の講義を行った
234	退屈させない工夫として、実際の臨床薬剤の調剤などを行う参加型の講義を行った

### 【専門教育科目・実習】

1	学生が困ることなく実験を終えるように、巡回を頻繁に行った。
2	スムーズに実習が進むよう、積極的に声をかけてサポートした。
3	実習において大学院生も含めて配置してきめ細かい指導を行い高い評価を得た。
4	実習後に行ったアンケート結果を活用し、シラバスの改良を行った。
5	実習レポートの書き方について、細やかな指導を行った(99名に指導)。
6	生化学実習レポートにおいて過去のレポートの写しを提出した場合に判別できるように実習を工夫し、写しを提出した学生には再提出と指導を行った。また、実習についても学生の担う部分を多く変更した。
7	実習では、新規に設定したテーマをさらに改良し、安定した結果が出るように工夫した。また、最新の分子生物学的手法やゲノム情報に関する内容を盛り込み学生の興味を引くようにした。
8	実習に関しては、説明スライドに動画を増やし、視覚的理解の改善を行った。
9	自身の最新論文で確立した技術を学生に指導することで、最先端で技術であることを強調、学生に興味を持って貰うことが出来た。
10	組織学実習において、組織像と臨床的医学知識を関連付けて解説し学生の興味を引くとともに学習意義の自覚を促した。
11	組織学実習において、細胞形態・組織構造が示す特徴と器官の機能を関連付けて解説し、2年次で学習する基礎医学の横断的理解を促した。
12	組織学実習において、スケッチの提出レポートには問題点を示したコメントを付記してフィードバックした。
13	神経解剖実習において、ユニット9で学習する症例に関する知識と関連付けて解説し、2年生次より高次元の理解を促した。
14	神経解剖実習において、組織切片像と脳標本を関連付けて解説し、二次元像と三次元像の理解が結びつくように留意した。
15	解剖実習・骨学実習において、希望する学生に対して解剖手技についてのレクチャーを行った。
16	19時頃まで学生の実習指導を行っている。
17	動物性機能実習において一部の難解な実験を削減し、よりわかりやすい内容に変更した。
18	1) 植物性機能生理学実習では、高度な内容の実習ができるよう、実習書および実習ビデオや測定装置なども自作して改良を加え、最先端の設備にした。 2) 植物性機能生理学実習では、高い実習品質を維持するため、講義アンケートを毎回おこない、その結果を即時にフィードバックした。 3) 植物性機能生理学実習では、学生のアクティブラーニングを促進するため、実習の全体ディスカッションを行い、学生に発表させた。 4) 植物性機能生理学実習では、予習と復習によるアクティブラーニングを促進するため、実習書やディスカッション資料はカラー印刷し、専用のウェブページ(学内限定)でPDFファイルを配布した。 5) 植物性機能生理学実習では、学生の理解を深めるため、学生からの質問には十分な時間を割いて面談し、丁寧に指導した。
19	薬理学実習にて薬物動態シミュレーションソフトによる薬物血中濃度モニタリングの演習を行った。学生が理解しやすいように演習形式で実習を進め、患者の条件(年齢・症状など)の違いによる薬物血中濃度変化をグループごとに考察させた。
20	薬理学実習では、尊い命を扱う実習の意味を十分理解させ、自分達で薬の作用を体験し興味を抱いてもらう実習を心掛けた。

21	病理学実習で無駄のない時間配分にして、学修の効率化を図った。
22	選択コースでは病理診断から症例の考察を経験させることができた。
23	実習と講義をリンクさせ、効果的な理解を図った。
24	実習では、なるべく多くの学生の質問に答えられるよう気を配った。
25	微生物学実習書の改善を行なった結果、学生の総合評価も良好で、取組みが高く評価された。
26	微生物学実習では、実習内容を説明する冊子の改善を毎年おこなっている。
27	社会医学実習と研究室配属プログラムでは、学生に頻繁に声をかけたり質問したりして、自身で考えることを促した。
28	実習のまとめ、ディスカッションに時間を費やし理解を促した。
29	実習では、実施中に巡視して指導し、終了後にはレポートを点検し指導した。
30	実習に関しては、関連文献等を提供し、データのまとめ方、発表デザインについてこまかく指導した。PBLは班によって議論への積極性が異なるので、介入の仕方を毎回変えた。
31	病棟実習後期に課題レポートの発表を始めた。
32	病棟実習後期で新患外来実習を始めた。
33	外来実習ではできるだけ実際の患者さんの所見をみってもらうように努めた。
34	画像診断を実習に取り入れ視覚的に膠原病リウマチを理解できるように工夫した。
35	毎週月曜日新患外来にて病歴聴取、胸部X線、CT読影の指導を行った。
36	医学科5年生病棟臨床実習において呼吸音の正常、異常についての講義、胸部X線読影の講義を行い、呼吸器学の基礎について学生指導した。また、カンファレンスや回診で学生の指導に当たった。
37	医学科5年生の臨床実習では、実務的な問診・診察技法を習得するための指導をした。
38	医学科5年生選択臨床実習では、最適な症例を選択し、医学生が4週間で患者と信頼関係を築き、医学的にも深い学習をできるように学会発表に準じた論文検索、発表を行う方針とした。
39	国際認証に伴う病棟実習（前期・後期）のカリキュラム変更を行った。
40	終日1学生をマンツーマンで指導する体制へ変更し、外来及び、入院患者に対する診察、検査、病状説明等
41	SDに対して副主治医の立場で指導を実施した。外来診療時間の他に、個別に、朝、夕対面指導を実施した。
42	5年生の臨床実習における心エコーレクチャーは、卒後研修センターにおいて、学生全員にお互いに実際のエコーを使用させ、時間をかけて丁寧に説明するように心がけている。
43	専門外来で、新患患者の問診、診察を行わせ、診断までのプロセスを自分で考えて導き出せるような指導に努めた。
44	ミニレクチャー・手技/外来見学などの循環器臨床実習の枠組み作成を行った。
45	外来実習は単なる見学型でなく、1症例のみに限定して立ち合いで自らが診察した気分で診断させる形式とした。
46	外来実習での予診を開始した。
47	臨床実習中でも押さえておきたい腎病理所見の基礎と実臨床での例を提示し理解の助けになるよう取り組んだ。
48	実習中に行う講義に用いるスライドを更新し、より学生が見やすい形とした。
49	後期選択実習において、学習内容のプレゼンテーションを週1回行ってもらうこととし、プレゼンテーション内容に応じた講義をすることとした。
50	臨床実習では様々な症例を経験できるように患者を振り分けた。監督のもと積極的に手技を学ばせた。
51	病棟実習は糖尿病・内分泌の疾患を教えるだけでなく、POSを用いて症候学・鑑別診断を主体に指導した。
52	外来実習の中で問診のとおり方、糖尿病の治療についても患者を通して指導した。
53	臨床実習のカリキュラムが変更になったことに伴い、医学科5年生10名と当科の指導医10名にヒアリングを行い、学生が臨む実習体制と指導医側が望む指導体制の調整を行った。
54	6年生選択実習学生の海外学会帯同を行い、学術的な興味、考え方の理解が深まり、海外の研究者との交流を促すことが出来た。
55	病棟実習では、患者の付け替えや診療を通じて、疾患や治療に関して教育を行った。また、医療の現場で働く上での常識やコミュニケーションスキルを教えた。
56	外来実習では、患者との診療を見せながら、外来診療の進め方や疾患治療に関する教育を行った。
57	病棟実習では、患者とのコミュニケーションスキルや、医療現場で働く上で最低限必要な人として、医師としての在り方を教えた。疾患や治療についても実際の患者を見ながら教育した。
58	外来実習では患者との診療を見せながら、診断治療の進め方を教育した。
59	病棟処置に学生を参加させ手技を指導した。
60	手術において手洗いの実施や基本的な手技を見学させた。
61	5年生の実習と変化を付けるため、シュミレーターによる手術体験を6年生の実習に積極的に導入した。
62	実習では、手術に入る前に術式の流れやポイントを説明し、手術に興味を持って参加できるよう工夫した。また、術中に実際の解剖や手術手技について説明を行い、その中で質問を行い、自己学習課題が持てるように心掛けた。
63	臨床実習では教科書に載っていない落とし穴や最新のエビデンスを調査して診療方針を決定するプロセスを一緒に進め指導した。



64	医学科5年生の臨床実習に際し、オリエンテーション、診察の指導、実習評価を行った。
65	実際の手術や症例をできるだけ経験してもらうように工夫した。
66	研究室実習
67	実習学生が当科実習に入りやすいように導入を指導
68	実習学生の評価レポートを確認
69	臨床実習では、実際に糸結びをおこなってもらったり、手術前後の時間に手術用顕微鏡を動かしてもらったり、できるだけ体験することで、難しさや面白さを感じてもらえるようにしている。
70	臨床実習での講義においては、臨床上重要だが学ぶことの少ない項目を取り入れ、質問をしながら講義に参加させるようにしている。
71	顕微鏡下の切離、縫合操作を基本としているが、人工血管等さまざまな材料を用い、実際の手術に近い環境を実現しより興味をもって取り組めるように工夫している。
72	臨床の症例から生理、解剖学など基礎の分野も考えさせるように努める
73	臨床実習の学生の講義及び指導
74	実習では、臨床参加型実習を行っている。
75	手術実習では、単なる見学ではなく術野モニターを供覧し on time discussion を行っている。
76	手術解説に関しては手技だけでなく、疾患の理解を深める機会となるよう工夫している
77	臨床実習前の学生には、基礎学から臨床症例に繋がるような具体的な説明や授業を工夫した。
78	臨床実習の学生には、臨床現場で医師としてどのようにアプローチするのか考慮させるレクチャーを心掛けた。
79	外来診察実習や病棟実習では病態や患者さん背景などを学生主体で思考できるよう、常に質疑応答形式で指導を行った。
80	手術見学、実習では、手術操作の意味や解説に加えて、関連する病態についての質問を加え、常に学生に考えさせるように工夫した。
81	外来実習や病棟患者割り振りでは経験が各学生でなるべく均等となるように工夫した。
82	学生の実習などに従事した。
83	実習では、医療場面を想定したロールプレイを用いて指導をすることで医療面接や精神療法に関して体験に基づく学習になるように、また精神医療の現場で実習生が傷つくことなく安全に実習に取り組めるように配慮した。
84	マンツーマンで臨床に携わり、常時精神的な関心、興味を持った質問を受け付け、活発な議論を導いた。
85	実習におけるミニレクチャーでは、学生が積極的に参加できるように双方向の講義を心掛けた
86	実習では学生にプロフェッショナリズムを意識させるよう心掛け指導した。
87	臨床実習については、実際に休日夜間診療所に来た患者を例に挙げて指導。
88	実習では、事前に患者情報の説明を行い、自己学習を促した。
89	病棟では小児ならではの特性に興味をもってもらえる様に検査値の考え方等を解説した
90	実臨床の症例で症状や検査データ、病態生理を理解してもらう様に問いかけを行った
91	臨床実習では、臨床研究についての取り組み方などの指導をおこなった。
92	心電図、心臓カテーテル検査画像など実際に画像リアルタイムに見て考察し臨場感を実感してもらう。
93	カルテ記載についての添削や指導を行った。
94	外来実習において、患者呼び入れ前に、患者の概要を説明し、イメージしやすいように努めた。
95	日々の実習の最後に振り返りを実施し、フィードバックを行った。
96	手術では実際に解剖等解説しながら行った。縫合を練習したあと、実際に手術手技を実践してもらった。
97	臨床実習では豚眼を用いた手術実習に関して、5年生全員に実際の手術を体験させた。
98	PowerPointを用いた臨床実習の学習資料内容の充実を行った。
99	学生を積極的に手術助手として参加させた。
100	外来で模型や図表、実際の超音波検査を呈示しながら指導を行った。
101	3/4年次選択実習において学生のPCに統計ソフトをダウンロードさせ、仮データにて生存率解析を実習させた。
102	6年次選択実習において、副鼻腔実態モデル・骨標本・内視鏡を用いて指導を行った。また同実習においてOBが院長であるクリニックでの見学実習を取り入れた。
103	病棟医長であったため、学生が手術助手として参加出来る症例に積極的に参加させた。
104	外来見学時は、所見のある患者さんを実際に診察させ、鑑別診断や次に必要な検査などを考えさせた。
105	選択コースの学生に対しては、できるだけ座学だけでなく、模型実習など経験型の学習時間を多くするようにプログラムした。
106	臨床実習では学生ごとに入院担当症例を割り当て、レポートをチェックしながら学生の不足する知識を補うよう説明を心掛けた。また、外来手術では手術助手として積極的に手術に参加してもらい、術後に手術のフィードバックを行うことで、口腔外科処置の特徴や、個々の症例に重要な点について理解できるように説明を行った。
107	OSCEのBLS指導では、必要なポイントを正確に教え、一人一人への指導を心掛けた。
108	臨床実習では、麻酔学に興味を持ってもらえるよう指導した。

109	臨床実習指導について、麻酔管理をただ見学させて説明するだけでなく、麻酔中の全身状態の変化やその対応についてなどを実習生自身にこれまでの生理学や病態の知識を利用して考えるよう促しながらディスカッションしていく方法をとった。
110	外来実習において、ペインクリニックにおいてメジャーな疾患（三叉神経痛・帯状疱疹後神経痛など）に関して、実習のオリエンテーション時に、自分の外来実習割振り日前にあらかじめ勉強してくるように伝え、興味が持てるようになるべくその疾患の患者がいるときにはその患者がいる先生につけるよう動いた。
111	実習の指導は講義スライドを新しいものに作り替え使用した。できるだけ多くの学生と長い時間接するように努め、個々の学生の到達度に合わせた指導を行った。統括試験用の画像問題は新しいものに変更した。
112	病棟実習の新カリキュラムの検討に参加、実習講義に国試の問題も取り入れている
113	実習中の放射線検査時の患者説明に立ち合わせ、手技をなるべく行わせている
114	実習では、積極的に学生に話しかけ教育した。
115	今年から一回の実習人数が増えたので、レクチャーの時に各学生が個別に考えられる時間を増やすよう試みた
116	臨床実習では、PBL形式授業とReverse CPCを行っている。また、知識習得のチェックとしてe-learning用テスト形式を実施。
117	輸血学については教育用DVDを用いて実習を行っている。
118	実習内の講義であるため、実習中の感想などを聞くことから講義をはじめ、一方的にならないように講義している。また、できる限り、自分の言葉で考えが発言できるように一人一人に問いかけ発言を求めるようにしている。資料については最新の情報を加え作成した。さらに選択コースの学生が増えており、よりがんゲノム医療、特にがんゲノムパネル検査について特化した内容にして行っている。
119	学生実習における振り返りの工夫
120	外傷初期診療をガイドラインと実臨床に基づいて指導し、研修医になったときに役立てられるように教育した。
121	今年度からのPC必携化に伴い、物理実習において、心電、筋電、指尖容積脈波等、生体情報を測定し自分のPCに取り込めるような内容に変更した。この実験システムの為、独自にプログラム開発を行った。実験システムに関して、医学教育学会で発表した。
122	臨床実習後OSCE成績不振者にOSCEおよび医師国家試験準備の指導を行った。
123	生命倫理学や医療入門Ⅰではルーブリック評価法を導入し、学生自身の評価をもと、実習中の態度やグループ発表に関してフィードバックを行った。
124	医療面接実習では、模擬患者団体に協力してもらい実践的な実習を実施した。
125	海外臨床実習に参加する学生には事前オリエンテーションで現地の安全情報や危機管理について説明した。
126	組織学および組織学実習では、学生に対して基礎に戻った説明を、ときにはマンツーマンでおこなった。これにより、学生の理解度も高まり、学生による授業評価で高い評価を得た。
127	実習科目において、実習施設の指導者との教育内容についての事前打ち合わせを行い統一した関りができるよう取り組んだ。
128	技術チェックでは、技術の改善案を明らかにし、学生が自らの課題が理解できるよう指導を行った。また必要時は、レポートに追加資料を添えて指導を行った。
129	実習においては、実習前から学生の学習状況を確認し、課題を明確にして臨んだ。実習中は、毎日記録物を確認しコメントを記載し、学生が次の日に修正して実習に臨めるようにした。必要時は、時間外に指導時間を設け、個別指導を行った。また、実習中の技術の経験を期限を決めて確認し、実習指導者と調整してできるだけ学生が経験できるようにした。カンファレンスでは、学生だけでなく、実習指導者とも内容の調整し、学びの多いカンファレンスになるようにした。
130	臨地実習期間以外にも実習環境整備に取り組み、学生の臨地実習が円滑に行えるよう配慮した。
131	精神看護学実習では、実習開始前に学生へのオリエンテーションやガイダンス、体調・物品管理表の作成、看護部及び実習指導者と事前に打ち合わせや確認を行いながら必要物品を整備し、学生が円滑に実習が行えるように取り組んだ。
132	臨床実習では実習指導者と学生の目標到達地点を共有し、効果的な学習ができるように工夫している。
133	実習では、一部学生の要望を取り入れ、実習病棟との調整を行った。
134	実習に際しては、学生個々の能力・学習準備状況を考慮し、個別的な対応・指導が行えるよう努めた。特に、急性期にある患者の回復状態・変化を適切に捉え援助することができるよう、タイムリーな指導を重視した。
135	統合実習では、これまでに学生自身が課題と感じていることをもとに、学生と一緒に実習内容を検討するとともに、実習前に勉強会を実施した。
136	実習では、対象者の理解が深まるよう、一人一人の理解度に合わせて援助し、看護過程が展開できるよう関わった。
137	老年看護学実習において、在宅復帰シミュレーションを追加したことで、学生と臨床指導者の双方から高評価を得た。
138	統合実習において、山間部、中山間部、市中の三か所で実習を行い、地域性を踏まえた地域包括ケアについて学びを深めることができた。

139	9月開講の老年看護学実習（地域交流実習）では、昨年度の実習先や地域高齢者からの評価を踏まえ、より高齢者に適したもので、かつ交流が深められる内容とした。初年度であった昨年の実績を学生と共有しより良い企画にするよう努力した。
140	老年看護学実習ⅠⅡ、基礎看護学実習Ⅱにおいて、スムーズに実習が行えるよう臨地実習指導者およびスタッフと相談をしながら調整を図った。全員が実習目標を到達できるよう、個人およびグループに指導を行った。
141	統合実習の助産コースでは、母性看護学実習、助産学実習を繋ぐ内容を意識し、知・技・体験を深めた。
142	助産学実習では、施設ごとに実習時期をずらし、学生の実習施設、人への適応に支障がないようにした。また、技術実践の動画を撮影し、その内容を教員と学生でリフレクションした。
143	統合実習は、実習内容を産褥期までとしたことで、アセスメント能力及び看護技術が高まり、次の助産学実習に繋げることが出来た。
144	母性看護学実習では、学内カンファレンスでのリフレクションを強化することで事象の根拠についての理解が深まった。
145	母性看護学実習では、学生が臨床で行われている母性看護の実際を知る機会を増やすために、ケアや保健指導が行われる予定を病棟スタッフに確認し、なるべく学生を同席させてもらえるように依頼した。出生直後の新生児の看護や胎盤計測などは、全員が関わることができるよう学生と時間の調整をはかった。
146	小児看護実習では健康な子どもの理解のため保育所実習を1日夏休み期間に実施した。夏休みの理由として、附属病院の子どもセンターの実習対象と子ども達が易感染状態であり、保育園実習で感染症の媒介者とならない配慮した。健康な子どもの発達を理解した上での病棟実習を行ったことで、同じ発達段階であった場合にはとても理解できたという学生からの意見も聞かれている。発達段階が異なった場合にも発達の経緯について理解をしやすくなったと評価する。
147	学生が公衆衛生看護学実習に取り組みやすいように事前オリエンテーションを丁寧に行った。学生から、わかりやすかったと評価を受けた。
148	公衆衛生看護学実習がスムーズに進行できるように、実習施設の調整を丁寧に行い、学生や実習施設からも実習がしやすかったと評価を受けた。
149	集中治療部における学生実習について、医療機器のモデルや実機などを活用した
150	実習では実際の症例のCT、MRI画像を用いて、正常画像解剖、異常所見、レポート作成のポイントをわかりやすく解説した。
151	グループ学習では、可能な限り学生の答えを引き出すような質問やアドバイスを心がける
152	実際に主義を体験してもらい実践してもらい
153	実習では参加型移行を主導し、学生に回診で直接指導する形式を継続した。
154	実習中に診察を積極的に行うよう（自分で意識して所見を取らないとわからないこと）指導した。
155	採血などの手技を積極的にさせるように指導した
156	臨床実習は、昨年度に加えて更に参加型実習となるよう、レクチャーを減らすなどのプログラム改変を行った。国際認証審査員の見学への対応を行った。
157	OSCE実習に関しては一通りの説明・実習ののち、3人以上のグループを作らせ、ランダムで診察の問題を出題。手引きを確認することなく診察ができるのかを評価。また診察を評価する人をつくりその人が手引きを確認しながら評価することで、第三者の目線で人の診察を観察・評価、悪い部分のアドバイスをさせるようにした。
158	各カンファレンス後に学生を集めて、カンファレンスでの疑問点や重要な知識の確認を行った。
159	臨床実習では、学生自身による考察を深められるよう、粘り強く対応した。
160	集中治療室内での患者の状況や機材、薬剤の説明を行う際に、なるべくベッドサイドで、実際の患者さんや機材を見たり、触れたりして、実感ができる形で、実習を行った。
161	学生からの質問にも、資料を見せながら、理解できるまで、丁寧に説明した。
162	今年度は6年生と5年生の病理部実習が重複し、4月から8月までの教育業務負担(特に病理部実習)が非常に重かった。病理部専従の教員は私のみであり、技師の協力も得て、病理部実習を行っているが、今年度の業務負担量は診療業務への影響が危惧される程であった。そこで、病理部の自己資金で教育担当の技師を、非常勤職員として実習期間中に臨時雇用することで、何とか実習を成立させることができた。今年度は「教育改善」というよりは、「実習を成立させる」ことに労力を費やした。
163	学生実習では内視鏡検査に画像を用いながらの説明や非侵襲的検査における検査準備を協力させた。
164	学生実習でもスライドを用いながら解説を行い理解の向上に努めた
165	臨床実習においては常に学生に質問をし、学生の理解度を確認し、最終評価の基準にもしている。
166	内視鏡処置においては学生が対応可能な範囲で介助に参加してもらい、治療に参加している意識付けを行った。
167	リハビリテーション医療の幅広い領域と内容について理解や興味を深めてもらうために、実技を盛り込み指導を行った。
168	臨床実習では診察の流れを経験するとどまらず、学生であっても臨床での意思決定をさせて医局内でプレゼンテーションできるところまでを課した。
169	カテーテル実習やエコー実習では、模型や学生同士で実際に手技を行うことで理解につながるよう努めた。
170	外来検査指導時には、なぜその検査が必要なのかや、検査時にどこに注目すべきかなどを事前に伝えるようにした。

- 171 いずれの実習も、学生に質問しながら指導を進めていき、会話が一方的にならないように努めた。
- 172 統計学的視点からの研究デザイン、統計解析の方法、論文および発表に関する統計的な解釈と表現方法、などの相談を受け入れ、実演指導及び助言などによって円滑に学位論文研究や日々の臨床研究に役立てやすい方法、効率的な方法を指導した。
- 173 2019年度からの新臨床実習カリキュラム作成において中心的役割を果たした
- 174 臨床病棟実習では、多くの臨床所見を見学し、学生が体験できるように配慮した
- 175 臨床外来実習では、個々の外来症例ごとに、症例のフィードバックを行った
- 176 超音波検査の見学時に実際の画像を使用し見方を説明した

### 【PBL・TBL】

- 1 無駄話をして、学生がリラックスするように心がけた。
- 2 単なる勉強にならないように、身近な話題から社会医学を考えることができるよう話題を振り、議論を促した。
- 3 PBLでは、学生が自発的に討論出来るように裏方に徹しつつも場の雰囲気をよくするために積極的に話しかけた。
- 4 PBLチューターに関しては、奨励の内容にとどまらず、物の考え方などを伝えるようにしており、アンケートを見る限り高い評価を得ている。
- 5 PBLに関しては、単なる個人の発表会ではなく、全員参加の討論会というスタンスを強調し実践させた。
- 6 今年から社会医学のPBLチューターに変更になったが、自身の安全衛生委員会委員としての経験や、自身が保有している安全衛生関連の資格に関する知識をPBLでの学生への介入に活かすことができた。
- 7 PBLにおいては、質疑応答に積極的に取り組むよう指導した。
- 8 PBLにおいては、患者の立場、医療者の立場をより実践的な立場から慮るよう働きかけた。
- 9 課題に応えることがどういうことなのかを認識させ、知る面白さや難しさを認識させた。
- 1) PBLの学習効率を高めるため、PBLセッションにおける「問い」と「答え」を、必ず黒板に可視化する方法を徹底させた。
- 10 2) 発表では、質疑応答の議論を必須として、必ず質問が出るように指導し、必要な補足をした。
- 3) 発表の内容とプレゼンテーションの技法について、発表した学生それぞれに一人ずつ、口頭で具体的な指導をした。
- 11 PBLでは学生間の議論が何となく終わってしまうのを防ぐため、解剖学・生理学の復習事項やCBT・国試で問われる重要事項に関して必ず学生に質問し考えさせ、納得して次のステップへ進めるよう配慮した。
- 12 PBLでは、学生主体の自発的学習と討論が行えるようにグループ全体の討論を方向付けるように心掛けた。
- 13 PBLチューターとして議論を円滑に進行できるようサポートし、討論が活発になる様に心がけた。
- 14 PBLでは、科学的な疑問点を指摘することで、科学としての医学を実践させた。
- 15 PBLでは、なるべく全員が発言できるよう配慮した。
- 16 PBLでは社会医学関連のシナリオ改訂に助力し、特に疫学研究の実際と統計解析について理解が深まる様に配慮した。
- 17 社会学の疫学のPBLのシナリオの総括講義の内容を改善し、学生が法論を理解しやすいように工夫した。
- 18 PBLでは、学生が発言しやすいように和やかな雰囲気づくりに努めた。
- 19 教養科目にPBL形式を導入した。
- 20 PBLシナリオを改訂した
- 21 PBLチューターとして、学生が発言しやすい雰囲気づくり、適切な疑問の投げかけなどに取り組んだ
- 22 PBLシナリオは五年目となり、小さな改訂を加え、総講義では検案書の書き方についても言及した。
- 23 TBLでは事前に講義を行い学生のディスカッションの基本となるように工夫し、TBL後の講義で質問事項について解説を行い理解を深めることができるように工夫した。
- 24 PBLチューターにおいては、安易な鑑別診断の羅列、キーワードによる一発診断に陥らず、医学的思考能力を高めるように議論を誘導し、すべての学生に発言機会を設けるように配慮した。
- 25 PBLでは単一の病態でよいのか、複数の病態が重なっているのかなど考えた上で鑑別を上げていくように指導した。
- 26 CBL講義では臨床に即した内容や最新のデータによる講義を行った。
- 27 チューターとして、時間外でも相談に乗り、学生からの発言が聞きやすい様な環境で話し合った。
- 28 PBLでは学生の討論が進むように臨床に沿った質問を行った。
- 29 PBLチューター時にミニレクチャーを加えた。
- 30 CBLのシナリオは常に改変して新鮮さを維持した。
- 31 PBLでは、学生発表に対する補足を適宜行い、質問しやすい雰囲気を作った。
- 32 PBLでは、理解が深まるように心がけた。
- 33 CBLシナリオを昨年度と異なるシナリオに作りなおした
- 34 CBLで実際の診療に基づく症例提示を行い、学生に実際の診療に近い考え方を教えた。
- 35 PBLではできるだけ考えさせるような質問を行い、自発的に発言できるように促した。
- 36 PBLチューターに際し、適切な方向に議論が進むように促しを行った。

37	PBLチューターでは議論が途切れないように助言することに努めた
38	PBL教育において学生が話しやすい雰囲気づくりと質疑応答に的確にこたえられるように十分な予習をする
39	PBLチューターに関しては、グループ・メンタリティを尊重することで自主的に課題に取り組めるように配慮した。
40	PBLでは、疑問点として挙げた事柄を、臨床的にどのように重要かを説明して、ふたたび議論させた。
41	PBLチューターでは学生の議論を引き出す様に声掛けや問いかけを心掛けた
42	PBL講義は学生が興味を持てるように、臨床に即した内容となるように工夫した。
43	PBLにおける学習要項作成
44	学生に考えさせるように質問を工夫する
45	なぜその医療に至るのか、過程を考えさせるように誘導する
46	PBLにおいて学生の自主的な意見交換と自己学習を支援した。
47	CBLで教室内を巡回して解説を行い、興味が薄い学生に積極的に関与させた。
48	PBLにおいては、最初のユニットであったため、進行の補助を行った。シナリオに沿った実臨床であり得る質問をなげかけて自己学習を促した。
49	PBLではチューターとして意欲的に学生が意見を出せる様な環境作りに努めた。また、自分の臨床経験を踏まえ、疑問に思った事など、例に挙げながら、積極的に学生のディスカッションの中に問いかけるようにした。
50	TBLにおいてモニターやDVDをデモンストレーションして臨床教育の動機づけを工夫した。
51	PBLに関しては学生が議論しやすいような雰囲気づくりに努めた。
52	PBL授業では、学生主体を守りつつ、不足しているところ・滞りなく進むよう誘導した。
53	PhaseIII検討部会、unit2コチエアー、シナリオ作成、問題作成に参加しPBL教育の改善に当初から取り組んでいる。
54	PBLシナリオに画像を取り入れ、画像読影実習をおこない4.7という高い評価を得ている
55	PBLでは学生の主体性にまかせて要点だけを指導するように心がけた
56	TBL授業の工夫
57	PhaseⅢチエアマンとして検討部会を定期的開催し、PBLの問題点の把握と解決につとめた。
58	PhaseⅢでのCBL運営のため、ガイドを作成し教材作成を支援した。
59	PhaseⅢの成績不振者に学習別面談、指導、補習を行った。
60	チューターの指導では、1年生ということもあり、大学の学習方法や生活のあり方に順応できるよう関わった。それぞれの学生の個性を把握し、個々にあった指導を行うことを意識した。
61	PBLでは臨床例を用いながら討論を誘導した。
62	医療プロフェッショナルリズム、CBLにも応用し、効率的な講義を展開した。
63	PBLチューターとしては学生達が自ら発言しやすい雰囲気作りに努め、臨床でも役立つ内容も付け加え、興味が持てるように配慮した。
64	PBLでは設問に対して適切な問題解決ができるよう学生実習に祭して適切に指導するよう務めた。
65	PBLチューター時の指導は臨床現場の症例に照らし合わせ、より実践的に指導を行っている。
66	PBLチューターに際しては学生の討論・考察を引き出すために必要と思われる介入を積極的に行っている
67	PBL・講義・実習にて学生が発言しやすいような雰囲気づくりを行った

#### 【その他・個別指導・マネージメント等】

1	医学科生、看護学科生4年生が 選んだ教員ベスト10（医学教育分野）で2位に選ばれた。
2	学生とよく話しをして問題点の解決について助言をおこなった。
3	理解しやすいようにわかりやすい言葉で伝えるように努めた。
4	ティーチングポートフォリオ参加
5	国立がん研究センターほか：皮膚腫瘍における免疫応答解析に基づくがん免疫療法予測診断法の確立（分担）
6	学生がなぜ佐賀大学での研修を希望しないか？という問いかけを行い、指導へのフィードバックとしている。
7	全国学会発表
8	症例プレゼンテーションはプレゼンテーション技術や患者の病態・背景をどこまで掘り下げ全人的に把握できているかを質疑応答形式で評価した。最終のeクリニカルクラークシップでは各学生毎に評価できる点・改善を期待する点を具体的に明記し、学生の実習意を高め、また医師となる自覚を持ってもらうように心がけた。
9	国際認証（JACME）においてエリア2の委員を担当した
10	日本医学英語教育学会が実施する医学英語検定試験の受験を推奨し、50名を超える学生が受験した。
11	力学概念調査（FCI）を実施し、その結果を分析して、物理学会物理教育部会にて発表した。その結果は今後の教育改善に役立てる予定。
12	危機管理能力に優れた実践的な国際看護領域で活躍する人材育成プログラムの開発研究が、科研費の基盤研究に採択され、SINCHI式教育モデルを開発して、日本災害医学会等で発表するとともに、国際看護の教育現場でも実践している。

- 13 臨床心理学の専門性を活かし、看護学や医学とは異なる視点からの臨床援助と教育を心がけた（例えば、緩和ケア医療に従事する専門職のメンタルヘルスや、患者－医療者関係におけるカウンセリング・マインドなど）。
- 14 臨床実習の医学生（SD）や医学科4年を対象にした勉強会を毎週開催した。
- 15 Phase III 検討部会世話人
- 16 臨床実習ポートフォリオ・評価システム e-クリニカルクラークシップの開発